



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	大阪市内の建築物を2日間で一斉公開する : 生きた建築ミュージアム事業について
Author(s)	山口, 知恵
Citation	CATS 叢書, 11, 267-273
Issue Date	2017-03-07
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66667
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS11_35.pdf



大阪市内の建築物を2日間で一斉公開する

生きた建築ミュージアム事業について

山口 知恵

株式会社ダン計画研究所 研究主任補

私は就職してすぐ、大阪市の「生きた建築ミュージアム」のお手伝いをさせてもらうことになった。「生きた建築」とは「近代建築をはじめ、大阪の歴史・文化、市民の暮らしぶりといった都市の営みの証であり、様々な形で変化・発展しながら、今も生き生きとその魅力を物語る建築物等」と定義されている（大阪市 2013）。私は在学時、「リビングヘリテージ（生きた遺産）」の言葉が持つ様々な意味のうち、「地元コミュニティが遺産に住んで遺産を保護、管理すること」、「有形の要素とそれを継承する際に必要な無形の要素を1つの遺産として捉えること」に着目して研究を行ってきたが、縁あって博士論文の研究対象と類似した概念と出会い、それを活用する仕事に関わることになったのである。この「生きた建築ミュージアム」事業の目玉は「生きた建築」の公開イベント「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪（以下、イケフェス）」の開催である。2013（平成 25）年度から3年間の実証実験を行った結果、3年目の最終年度には2日間で3万人が来場し、日本最大級の建築公開イベントとなった。イケフェス当日の大阪市内の街なかでは、公式ガイドブック片手に道を歩く人、建物前の長蛇の列などの非日常の風景が見られ、私自身、建築の可能性を再認識する経験となった。本稿では特に実務の視点から「生きた建築ミュージアム」事業の紹介を行いたい。

まず、「生きた建築ミュージアム」事業の詳細について記す前に大阪市の観光の現状について触れておきたい。「大阪市の主な観光地」と聞いて思い浮かぶのは、ユニバーサル・スタジオ・ジャパン（USJ）、大阪城、梅田界隈の「キタ」、道頓堀周辺の「ミナミ」の4地区ではないだろうか。それらは大阪市の代表的な観光地ではあるが、それ以外にも大阪には魅力的な文化やストーリー、建築物等がある。例えば、町人文化の中心地「船場」やあらゆる産業が栄え、文化・芸術・産業の中心として華やかで活気にあふれていた「大大阪時代」のストーリー、大大阪時代に建設された近代建築や有名建築家・村野藤吾等による作家建築である。大阪市はHOPE事業等の実施により、上記のような魅力発信の資源である建築物を保全・修景してきたが、多くの観光客は前述した4地区を見学するのみで、大阪市の魅力が十分発信できていないという課題を抱えていた。また戦後建築が更新時期に入り、保全の対象から漏れてしまった作家建築が取り壊される事が多くなってきていた。このような事態を改善する一つの手段として大阪市内の建築や文化の魅力を一斉に発信する、生きた建築ミュージアム事業がスタートしたのである。

さて、「生きた建築ミュージアム」事業は毎年9月の第3土日の2日間で歴史的建造物やデザイン性に優れた建築物が無料で一般に公開されるイギリスのオープンハウスロンドン（以下、OHL）から着想を得ている。20件からスタートしたOHLの公開建築は24回目の2016（平成28）年には750件近くになり、数千人のボランティアが参加し、世界中から25万人以上の見学者が訪れるロンドンの一大イベントとなった。OHLは「建築家を目指す学生や子供の教育、行政への提言などを通じ、持続可能で住みよい都市づくり」を目指している「Open-City」という非営利民間組織が主催している。「Open-City」は、上記の目標のもと、建築の魅力の発信と市民に向けた建築教育に関する事業を行っており、この一環としてOHLが開催された。「生きた建築ミュージアム」でもこの考えを参考に、イケフェスでは将来の建築分野の発展を担う子どもを対象としたプログラムを毎年設けている。

イケフェス開催、すなわち、このOHLを大阪で実施するにあたり3点課題があった。1つは行列整理である。OHLでは人気の建築の前の路上に長蛇の列が見られることも風物詩になっているが、イケフェスの実証実験の段階では市民にイベントは定着していない。また、OHLでは5、6時間近く道路に見学希望者が並んでいても警備員がいない場面も見られるが、日本でそのような状況になる場合は、警備員をつける、警察協議を行う等の検討が必要である。それらについて検討した結果、実証実験段階では警察協議やプロの警備員まで用意する必要はないが、イベントに参加していない市民の邪魔にならないよう、見学希望者が待つ場所を設定し、公開1時間前には行列整理や建物内部に入る人数制限を行う人員を配置し、多くの見学者を受け入れることができない建築物については事前申し込みと抽選を実施した。さらにOHLの建築公開方法と類似した建築内部を自由に見学する「特別公開」の他、所有者等の解説付きで建物内部を巡る「ガイドツアー」、複数の建築物をガイドとともにまちあるきしながら巡る「スペシャルツアー」、建築内部の空間を活用した「ワークショップ・展示」や「ミニコンサート」、会議室等で専門家や関係者が解説する「トークセミナー」、土日に休館している施設を特別に開館する「休日特別開館」等、7種のプログラムを用意し、多くの建築物を公開できるように工夫した（写真1～4）。

2点目は安全性である。ロンドンでは命綱無しで屋外の高いハシゴを7階まで登るような公開建築もあったが、そのような冒険心を掻き立てる建築物の公開方法は自己責任が文化的に定着しているロンドンでこそ可能であり、安全を重んじる日本人には不向きである。建物の公開にあたりライトを設置する、危険な箇所に入らないようテープを張るなどの設えを所有者と事前協議の上行うとともに保険に加入することで安全に建築公開できるよう努めた。

3点目は主催団体である。当初OHLに倣い非営利民間組織を立ち上げ、寄付金や広告費を受け取りやすくすることを検討した。しかし、イケフェスが周知されておらず、どれくらいの見学者が見込めるか不明な段階で出資してくれるほど大阪の企業は甘くない。よって、組織の立ち上げと資金繰りは今後の課題とし、この3年間は大阪市主催で実績をつくることに注力した。

以上の方針の元、当該事業を進めた結果、参加企業、公開建築数、プログラム数、見学者数は表1のように推移し、3年目には参加企業・団体約140、公開建築95施設、プログラム数120、見学者3万人のイベントに成長した。最終年度には北海道から沖縄の国内だけでなく海外（香港）からも見学者が訪れ、事前申し込みが必要なイベントでは、定員計1,505人に対し、計7,700名の応募があった。



写真1 ガイドツアーの様子
(御堂筋共同溝)



写真2 子ども向けスペシャルツアーの様子



写真3 展示の様子（ダイビル本館）



写真4 トークセミナーの様子（浪花組）

表1 イケフェス開催実績の推移

	参加企業・団体	公開建築数	プログラム数	見学者数
2013（平成25）年	16	15施設	8	573人
2014（平成26）年	約80	55施設	77	1万人
2015（平成27）年	約140	95施設	120	3万人

出所：2013年の概要報告及び2014～2015年の開催報告書を基に筆者作成。

イケフェスは表 2 のようにマスメディアにも多く取り上げられたが、実証事業終了後もイベントを継続できるようコスト管理を徹底した結果による費用対効果の高さが特に評価された。このコストカットの工夫についても 3 点に整理して説明したい。1 点目は産官学連携である。イケフェス実施にあたり、生きた建築の概念を広めるために代表的な生きた建築 50 件を大阪市が選定し、それらの所有者等が一堂に会する機会を設けた。これにより、大阪市内の企業トップの情報交換の場が作られ、建築公開や社員ボランティア等、企業によるイケフェス協力の機運が高まった。また、イケフェス終了後は、「広報に繋がる」とイケフェスに参加した効果を感じている企業の声も多く聞かれた。大学は生きた建築事業の助言をはじめ、後述する市民ボランティア制度やプログラム等の試行実施、公式ツイッターによる広報等を支えた。

2 点目は市民協働である。OHL 同様にイケフェス試行実施の最終年度には市民ボランティアを公募し、行列整理や写真・人数記録等のスタッフとして活躍してもらった。ここでは OHL のプライオリティパス（公開建築に優先的に入場できるパス）制度を参考に、競争倍率が高く参加が難しい事前申し込みイベントへの優先参加権をボランティア謝礼のメインとした。

表2 平成27年度のパブリシティによる広報

種類	内容
新聞掲載	7月21日 日本経済新聞夕刊
	10月22日 毎日新聞夕刊
	10月29日 産経新聞朝刊
	10月30日 朝日新聞夕刊
	11月 2日 産経新聞朝刊
	11月 4日 建設通信新聞
	12月12日 産経新聞朝刊
テレビ放映	10月13日 ABC朝日放送「おはよう朝日です」
	11月 5日 読売テレビ「ニュースten」
雑誌・書籍	10月 1日 『建築と社会』
	10月 1日 『月刊島民Vol.87』
	10月13日 関連書籍『生きた建築 大阪』
Webニュース	10月14日 ツタヤT-SITE lifestyle
	10月14日 ケンプラッツ（日経アーキテクチュア）
	11月 6日 ケンプラッツ（日経アーキテクチュア）
	11月16日 ケンプラッツ（日経アーキテクチュア）

出所：2015年の開催報告書を基に筆者作成。

3点目は広報の工夫である。このようなイベントを開催した際、予算の大半が広報費にあてられることが多いが、広報予算と実績がなかった2年目の2014年のイケフェスでは、地元助成金を利用して作成した公式ガイドブック以外は主にHP、SNSによる広報を行った。また、公式HPでは最新情報を掲載するとともにガイドブックのデータをDLできるようにした。上記の広報により1万人来場した実績を得た2015（平成27）年度では、関連イベントとの連携、大阪市交通局の協力を得る事ができ、地下鉄構内や市バス、地下鉄車内にもポスター等を掲出し、より幅広い市民に広報することができた（表3、写真5参照）。特に公式twitterでは見学者間のやりとりが見られた。1年目から設けた公式twitterはフォロワー50名程度で推移していたが、2年目から事務局スタッフが積極的にイベントの進捗をつぶやいたところ、建築好きのフォロワーから建築好きの知人へと繋がっていき、2015（平成27）年12月時点では、フォロワーが2,300名になった（表4参照）。特に事前申込イベントの当落通知直後は当落について様々なツイートが飛び交い、イベント当日も「〇〇ビルは混んでいるよ」や「〇〇ビルはオススメ」という見学者のやりとりが見られ、リアルな世界でも情報交換をしている様子が見られた。上記のようにコスト削減を図る一方、デザインには拘ることを決め、確保した予算はデザイン費やバナー（写真6）制作費、会場の設え等に充当した。

さて、以上3年間の実証実験が終了した翌年の2016（平成28）年度は、今まで建築公開をしてきた企業と有識者を中心に「生きた建築ミュージアム大阪実行委員会」を立ち上げてスポンサーを募り、予算の大部分を占めていたガイドブックを有料化し書店で販売する等、新たな組織として「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪2016」の開催に取り組んだ。その結果、2016年のイケフェスでは、21のスポンサー、119の協力企業・団体が集まり、76件の建築を公開することができた。今後も10月下旬～11月上旬の土日にイケフェスを開催し続ける予定であり、新たな大阪を代表するイベントとして、更なる盛り上がりが期待出来そうである。本稿で紹介できなかったイケフェスの面白さについては実際に参加することで感じて頂きたい。



写真5 ポスター掲出の様子



写真6 バナーを掲げた公開建築の様子

表3 2015（平成27）年に実施した広報

印刷物	サイズ等	作成部数	配布・掲出場所等
イケフェス2015公式ガイドブック（無料）※1	A5サイズ48頁 フルカラー	20,000部	大阪市役所等大阪市関連施設，イケフェス参加施設
フライヤー（日程予告）	B5サイズ 片面2色刷り	10,000部	イケフェス参加施設，関連イベント会場
ポスター	B2サイズ ※1	200部	大阪市内イオングループ店舗，イケフェス参加施設
	B1サイズ※2	270部	大阪市営地下鉄全駅構内
チラシ	A4サイズ※2	19,000部	大阪市営地下鉄全駅構内
沿線のご案内	定型	地下鉄1,260両 バス560台	地下鉄・バス全車内
告知パネル	B2サイズ	10枚	イケフェス参加施設

※ 1 発行協力：一般社団法人大阪集英教育会（地元団体）

※ 2 関連イベントと連携して作成

出所：2015年の開催報告書を基に筆者作成。

表4 2015（平成27）年におけるインターネット，SNSを活用した広報の成果

種類	件数	備考
イケフェス2015 特設サイトアクセス数	49,658	イベント期間前後4ヶ月におけるアクセス数。 10月11日～10月17日の大阪市HPへの週間アクセス数第1位（TOPページを除く）
イケフェス2015公式 ガイドブックPDFファイル 一括DL回数	8,676	イベント期間前後3ヶ月半におけるアクセス数。
公式ツイッターアカウント フォロワー数	約2,300	平成27年12月時点 【参考】イケフェス2014開催時（平成26年11月時点）約870
インスタグラムのハッシュ タグ付きの投稿数	約1,000	ハッシュタグを付けた写真投稿数

出所：2015年の開催報告書を基に筆者作成。

文 献

大 阪 市

2013 『大阪市生きた建築ミュージアム事業基本要綱(平成 25 年 9 月 12 日改正)』, p.1。

2013 『生きた建築ミュージアムの実現に向けて 「生きた建築ミュージアム 2013・大阪セレクション×実証実験」 概要報告 』, pp.1-5。

2014 『生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪 2014 (イケフェス大阪) 開催報告書』, pp.1-10。

2015 『生きた建築ミュージアム フェスティバル大阪 2015 開催報告書』, pp.1-10。

生きた建築ミュージアム大阪実行委員会

2016 『生きた建築ミュージアム フェスティバル大阪 2016 公式ガイドブック』, pp.5-6,47-50。